

青年期の性行動・性知識に関する実態調査（第二報）
－避妊行動と青年期対象関係尺度に焦点を当てて－
A Survey on sex of College Students (2nd report)
Focusing on contraceptive behavior and adolescent object relations scale

坂本保子，藤邊祐子，高橋雪子，前森桃子

要旨

本研究は、青年期の対象関係が避妊行動にどのような影響を及ぼすのかを検討し具体的教育的関わりを目指すために質問紙調査を実施した。結果、青年期の対象関係と大学生の避妊行動との相関関係が明らかになった。「見捨てられ不安」と「妊娠しない」($p < .05$)との間に「一体性の過剰希求」と「自分の欲求を満たしたい」($p < .01$)、「一心同体になりたい」($p < .05$)との間に弱い正の相関が認められた。不安や見捨てられてしまうという強迫観念が、心理的に弱い立場となり、自分は妊娠しないと思うことや避妊の意志表示ができないことが考えられる。

見捨てられ不安が強い学生には、大学教育の中で自己を尊重し自己肯定感が高められるような関わりをすることで避妊行動がとれ、大学生の不確実な避妊行動の認識を早い段階で正しい知識の習得と認識と実践の相違を回避する方策の必要性が示唆された。

キーワード：大学生， 避妊行動， 対象関係

I. 緒言

大学生は、青年期の中でも青年期後期¹⁾に位置づけており、青年期は挫折や欲求不満に直面したとき、一人の真の友人が存在するかどうかによって耐性力が左右され、パーソナリティを育てる²⁾と西平は指摘している。思春期は、生殖器以外に身体的差異が生じはじめ生殖能力を獲得するまでに至る、心身ともに子どもから大人に変化する過渡期をいう。エリクソンの心理発達論では、青年期は同一性対同一性の混乱とし、大人になっていくための準備期間という位置づけを定義している³⁾。またアメリカの発達心理学者の Arnett は、青年期から成人期への移行を準備期間ではなく新しい発達課題として成人生成期としている⁴⁾。その成人生成期における青年期から成人期への移行期について娘の母親からの心理的分離は母親との信頼関係を基盤として自律性や自我の発達と関連する⁵⁾と水本らは述べている。さらに井梅は、幼少期の安定的母子関係は良好な対象関係を示しており⁶⁾、対人関係に問題を抱える青年は、対人スキルの未熟さ、自己中心性、自他境界の未分化、見捨てられ不安、対人信頼感の欠如が存在する⁷⁾と述べている。

近年は、大人になりたがらない青年の増加も指摘され、自己否定的、自己中心的、短絡衝動的など自律成熟の問題が多様である。このように青年期は、他者との表面的な関係や深い関係、他者との関わりを回避するなどさまざまな姿である。

我が国における青少年の性交経験率は大きく変化している。大学生の性経験率では、

2005 年の第 6 回青少年の性行動の全国調査の報告では、男子 63.0%、女子 62.2%であった⁸⁾が、それ以降は、男女とも低下傾向であり、2017 年の第 8 回青少年の性行動調査時の性交率は、男子 47.0%、女子 36.7%⁹⁾と男女とも同様に減少し、第 15 回出生動向調査では性交未経験者や性に関心を示さない若者が増加¹⁰⁾している。大学生の触れ合い恐怖的心性に影響を与える要因は、親の養育態度、自己愛である¹¹⁾と溝口らは述べている。一方で高坂・澤村らは、大学生が恋人と性行為をする理由として「自己欲求」「愛情の確認」「相手からの要望」「周囲からの圧力」「支配・独占」「雰囲気」に分類される¹²⁾と報告している。厚生労働省による 2019 年の人工妊娠中絶件数は 156,430 件で、20 歳未満では、19 歳が 5,440 件と最も多く、次いで「18 歳」が 3,285 件である¹³⁾。このような望まない妊娠や中絶を選択せざるを得ない若年妊娠を減らすことも重要である。

以上のことから我々は、青年期の性行動や性教育について実態を調査し教育支援を検討したいと考えた。第一報では、大学生の性教育と性行動の実態について調査し、高等教育までの性教育では不十分であることを学生が認識しており大学の講義の中での教育実践の必要性が示唆された¹⁴⁾。第二報では、大学生は、不安定で他者を意識し他者の影響を受けやすい。そのため青年期の対象関係が若者の避妊行動にどのような影響を及ぼすのかを検討し青年期の時期において具体的教育的関わりを目指す。

II. 研究方法

1) 対象

青森県内における承諾を得られた大学 3 校の大学生の 3 年生と 4 年生の 133 名で、調査時期は 2018 年 12 月から 2019 年 5 月に実施した。

2) 調査内容

調査内容は、基本的属性として年齢、性別、学部、居住形態、性交経験、避妊について青年期対象関係尺度などである。無記名で自記入式質問紙を実施した。

3) 対象関係（青年期）尺度の評価

青年期における対象関係を評価する自己記入式質問紙で評価する。青年期の対象関係は「自己と他者との関係性に関する概念」であり、この尺度は井梅⁷⁾らが開発し、その後広く研究に採用されている。

対象関係（青年期）尺度は 29 項目の質問があり、各項目はそれぞれ“とてもそう思う”から“全くそう思わない”までの 6 件法で評価される。下位尺度は、「親和不全」「希薄な対人関係」「自己中心的な他者操作」「一体性な過剰希求」「見捨てられ不安」の 5 項目で構成されている。井梅ら⁵⁾によって尺度の構成概念妥当性は確認されており、尺度使用には原著者である井梅に使用承諾を得て研究に用いた。

4) 分析方法

すべての変数に対して欠損値は除外し有効な値だけ分析に使用した。その上で、年齢、性別、学部、居住形態、青年期対象関係尺度の得点を算出した。次に性交経験と避妊について χ^2 検定、Fisher の直接確率検定を行った。避妊行動に関する項目を従属変数とし、対

象関係（青年期）下位尺度の得点を独立変数とした統計解析を行った。性交経験の有無によって対人関係下位尺度の平均値の比較には、等分散性の有無を確認したのち、対応のない *t* 検定を用いた。妊娠をしない理由、性交経験、対象関係（青年期）下位尺度については *Spearman* の順位相関係数を算出した。有効水準は 5 % とし、両側検定を行った。解析には、SPSS Statistics 日本語版バージョン 24.0（日本 IBM）を用いた。

5) 倫理的配慮

対象者には調査票に依頼文を添付し、調査の趣旨、匿名性、参加の自由、研究以外で使用しない旨を明記し、回答の提出をもって同意したことを判断した。本研究は所属大学の倫理委員会の倫理審査をうけ承認（承認番号【8-10】）を得て実施した。

III. 結果

1) 対象者の概要

対象者の概要には第一報で報告したとおりである。第二報では青年期対象関係下位尺度の得点（平均値、標準偏差）を追記し表 1 に示した。希薄な対人関係の平均値は 2.19（標準偏差 0.82）、見捨てられ不安の平均値 3.35（標準偏差 0.99）、自己中心的な他者操作の平均値は 2.56（標準偏差 0.97）、親和不全の平均値は 2.90（標準偏差 1.01）、一体性過剰希求の平均値は 2.56（1.02）であった。

表 1 基本属性と対象関係尺度（青年期）得点

項目	カテゴリ	n = 133					
		全体		男		女	
		n	%	n	%	n	%
年齢	19歳	14	10.5	9	36.0	5	4.7
	20歳から21歳	94	70.7	10	40.0	84	78.5
	22歳から24歳	21	15.8	4	16.0	16	15.0
	25歳から29歳	2	1.5	0	0.0	2	1.9
	その他	2	1.5	2	8.0	0	0.0
性別	男性	25	18.8				
	女性	107	80.5				
学部	看護・保健	94	70.7	6	24.0	87	81.3
	社会福祉	7	5.3	2	8.0	5	4.7
	教育	1	0.8	0	0.0	1	0.9
	経済・経営	16	12.0	15	60.0	1	0.9
	健康医療	15	11.3	2	8.0	13	12.1
学生居住形態	一人暮らし	26	19.5	3	12.0	23	21.5
	家族と同居	88	66.2	10	40.0	77	72.0
	同居友人と	1	0.8	0	0.0	1	0.9
	その他	2	1.5	1	4.0	1	0.9
	寮	13	9.8	11	44.0	2	1.9
	下宿	3	2.3	0	0.0	3	2.8
対象関係尺度（青年期）	n = 131	平均値 標準偏差					
	希薄な対人関係	2.19	0.82				
	見捨てられ不安	3.35	0.99				
	自己中心的な他者操作	2.56	0.97				
	親和不全	2.90	1.01				
	一体性の過剰希求	2.56	1.02				

2) 性交経験と避妊について

性交経験と避妊については表 2 に示す。

避妊の意思行動を示すことができる学生は 95.1%、できない学生は 2.5%であった。性交経験がありの学生は 61.7%、性交経験がない学生は 38.3%であった。

避妊頻度では「いつもしている」42.1%、「ほとんどしている」15.8%、「時々している」3.0%、「たまにしている」0.8%であった。性交経験と避妊の頻度の間には有意な差は認められなかった。

性交経験がある学生の普段実施している避妊方法（複数回答）では、最も多いのは、男性用コンドーム 54.9%であり、次いで膣外射精で 15.0%、低用量経口避妊薬（ピル）・月経周期の活用で 12.0%、基礎体温法の活用 0.8%の順であった。性交経験と実施している避妊方法の関連の結果、男性用コンドームと膣外射精で ($p < .001$)、月経周期の活用で ($p < .01$)、低用量経口避妊薬（ピル）($p < .05$) で有意な差が認められた。

表 2 性交経験と避妊について

項目	カテゴリ	全体		
		n	%	p 値
避妊意思行動	できる	116	95.1	
	できない	3	2.5	
	その他	3	2.5	
n = 122				
性交経験	あり	81	61.7	
	なし	51	38.3	
n = 132				
避妊頻度	いつもしている	56	42.1	ns
	ほとんどしている	21	15.8	
	時々している	4	3.0	
	たまにしている	1	0.8	
n = 82				
実施している避妊方法 ※1	低用量経口避妊薬（ピル）	16	12.0	*
	男性用コンドーム	73	54.9	***
	基礎体温法の活用	1	0.8	
	月経周期の活用	16	12.0	**
	IUD（子宮内避妊用具）	0	0.0	
	殺精子剤	1	0.8	
	膣外射精	20	15.0	***
	避妊手術	0	0.0	
	その他	0	0.0	
n = 133				

※1: χ^2 検定, Fisher の直接確率検定; ***: $p < 0.001$ **: $p < 0.01$ *: $p < 0.05$ ns: not significant

3) 性交経験と対象関係（青年期）下位尺度との関連

性交経験と対人関係（青年期）下位尺度との関連は表 3 に示す

性交経験がある学生の平均点は性交経験が無い学生の平均点より「一体性の過剰希求」で平均値間に有意な差が認められた ($t = 2.082$, $p < .05$)。その他の項目では、有意な差は認められなかった。

表3 性交経験と対人関係（青年期）下位尺度との関連

	性交経験あり		性交経験なし		t 値
	Mean	SD	Mean	SD	
対人関係尺度希薄な対人関係	2.11	0.87	2.32	0.72	ns
見捨てられ不安	3.34	0.99	3.36	0.99	ns
自己中心的な他者操作	2.64	0.88	2.43	1.10	ns
親和不全	2.82	0.90	3.02	1.17	ns
一体性の過剰希求	2.71	1.07	2.33	0.90	2.08 *

t検定*: $p < 0.05$ ns: not significant

4) 避妊をしない理由についての相関

避妊をしない理由についての相関は表4に示す。

相関係数の分析で、【妊娠をしない】との相関では、「避妊具の準備が間に合わない」($p < .01$)、「相手の希望をかなえたい」($p < .01$)、「一心同体になりたい」($p < .01$)「避妊具購入に費用が掛かる」($p < .01$)、「相手のことが好き」($p < .01$)、「自分の欲求を満たしたい」との間に有意な正の弱い相関が認められた。【妊娠してもよい】との相関では、「嫌われたくない」($p < .01$)「一心同体になりたい」($p < .01$)、「相手のことが好き」($p < .01$)との間に有意な正の弱い相関が認められた。【避妊具の準備が間に合わない】との相関では、「自分の欲求を満たしたい」($p < .01$)、「相手のことが好き」($p < .01$)との間に有意な正の弱い相関が認められた。【相手に断られる】との相関では、「避妊を言い出せない」($p < .01$)との間に有意な正の強い相関が認められた。【雰囲気損なう】との相関では、「避妊を言い出せない」($p < .01$)、「嫌われたくない」($p < .01$)「自分の欲求を満たしたい」($p < .01$)との間に有意な正の弱い相関が「相手の希望をかなえたい」($p < .01$)との間に有意な正の強い相関が認められた。【避妊を言い出せない】との相関では、「相手の希望をかなえたい」($p < .01$)、【嫌われたくない】との相関では、「相手の希望をかなえたい」($p < .01$)との間に有意な正の弱い相関が認められた。【相手の希望をかなえたい】との相関では、「一心同体になりたい」($p < .01$)「相手のことが好き」との間に有意な正の強い相関が認められた。【自分の欲求を満たしたい】との相関では、「一心同体になりたい」($p < .01$)「相手のことが好き」($p < .01$)との間に有意な正の弱い相関が認められた。【一心同体になりたい】との相関では、「相手のことが好き」($p < .01$)との間に有意な正の強い相関が認められた。【避妊具購入に費用が掛かる】との相関では、「相手のことが好き」($p < .01$)との間に有意な正の弱い相関が認められた。

表4 避妊をしない理由の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 妊娠しない	-											
2 妊娠してもよい	0.140	-										
3 避妊具の準備が間に合わない	.287**	-0.051	-									
4 相手に断られる	-0.022	-0.015	-0.025	-								
5 雰囲気損なう	-0.045	-0.031	0.116	-0.015	-							
6 避妊を言い出せない	-0.039	-0.027	-0.044	.573**	.270**	-						
7 嫌われたくない	-0.032	.340**	-0.036	-0.011	.340**	-0.019	-					
8 相手の希望をかなえない	.282**	.196*	0.093	-0.017	.428**	.236**	.300**	-				
9 自分の欲求を満たしたい	.174*	-0.027	.341**	-0.013	.270**	-0.023	-0.019	-0.030	-			
10 一心同体になりたい	.387**	.270**	-0.044	-0.013	-0.027	-0.023	-0.019	.502**	.318**	-		
11 避妊具購入に費用が掛かる	.228**	-0.022	.199*	-0.011	-0.022	-0.019	-0.015	-0.025	-0.019	-0.019	-	
12 相手のことが好き	.249**	.386**	.212*	-0.019	-0.039	-0.033	-0.027	.338**	.211*	.455**	.271**	-

Spearmanの順位相関係数 **: $p<0.01$ *: $p<0.05$

5) 避妊をしない理由と対象関係（青年期）下位尺度との相関

「見捨てられ不安」との相関では、「妊娠しない」($p<.05$)との間に弱い正の相関が認められた。「一体性の過剰希求」との相関では、「自分の欲求を満たしたい」($p<.01$)、「一心同体になりたい」($p<.05$)との間に弱い正の相関が認められた。その他の項目では、有意な相関は認められなかった。

表5 避妊をしない理由と対人関係（青年期）下位尺度との相関

	対人関係尺度希薄な対人関係	見捨てられ不安	自己中心的な他者操作	親和不全	一体性の過剰希求
妊娠しない	-0.17	0.20 *	0.12	0.15	0.17 *
雰囲気損なう	0.17 *	0.10	0.05	0.05	0.19 *
自分の欲求を満たしたい	0.09	0.19 *	0.14	0.14	0.23 **
一心同体になりたい	0.05	0.19 *	0.12	0.14	0.20 *

Spearmanの順位相関係数 **: $p<0.01$ *: $p<0.05$

IV. 考察

本研究では、アンケート調査から青年期の対象関係下位尺度と大学生の避妊行動との相関関係が明らかになった。そのため、青年期の時期において具体的教育的かわりについて検討した。

1) 対象者の概要

青年期は、これまでの家族や親中心であったことと異なり、親からの独立をして自立する時期でもあり友人が青年期にとって大事な人間関係である。学生の居住形態では、家族と同居が66.2%であり、家族と離れて生活している学生は、34.8%であった。和田らは、住居形態で自宅生より下宿生のほうが性的に寛容で性体験レベルも高い¹⁵⁾と報告している。

家族と離れて生活することは、不安を抱える一方で性体験も経験しやすい環境である。しかしながら、本研究の対象者では、性交経験のある学生の6割は、家族との同居している学生であり和田らの先行研究とは異なる結果であった。このことは居住形態だけでなく地域の特性や家族との関係性も関連していると考えられる。

2) 性交経験と避妊について

日本性教育第8回青少年の性行動全国調査（2017）による性交経験率の報告では、男子47.0%、女子36.7%という結果である⁹⁾が、本研究の対象者は、性交経験率は男女とも60%を超えている。性交経験がある学生が実施している避妊方法は、男性用コンドーム、膣外射精で、月経周期の活用、低用量経口避妊薬（ピル）で有意な差が認められた。

避妊行動では、男性用コンドームが有意に高く、その他の項目では有意な差は認められなかった。性交経験と避妊については第一報で報告済みである。

3) 性交経験と対人関係（青年期）下位尺度との関連

性交経験がある学生は、「一体的な過剰希求」が有意に高かった。井梅は、「一体的な過剰希求」は、他者との心理的距離が過度に近く、自分の要求や行動が相手と100%共有されるはずだと思い、そのような相手を求めている傾向を示している⁷⁾と述べている。性交経験者が性交経験未経験者より他者との心理的距離が過度に近くそのような相手を求めているという結果であるといえる。

4) 避妊をしない理由についての相関

避妊をしない理由について「妊娠をしない」と「避妊具の準備が間に合わない」「相手の希望をかなえない」「一心同体になりたい」「避妊具購入に費用が掛かる」「相手のことが好き」「自分の欲求を満たしたい」に有意な正の弱い相関が認められた。また「妊娠してもよい」と「嫌われたくない」に有意な正の相関が認められた。「相手に断られる」と「避妊を言い出せない」に有意な正の相関が認められた。これらは、相手のことが好きであるまたは、嫌われたくないという思いから相手の希望をかなえ、自分が傷つくことを回避しそのため避妊を言い出せず妊娠しても良い、または妊娠しないと思っている可能性がある。これらは望まない妊娠、意図しない妊娠に結びつくことが考えられる。一方、コンドームの装着にもたつくと雰囲気が壊れる、雰囲気を損なわず、一心同体になり避妊具の準備が間に合わなくても自分の欲求を満たしたいなどということが考えられる。また妊娠をしないという不確かな根拠や避妊具の購入に費用が掛かるため避妊行動がとれないなどが考えられる。羽入らは、性行動によるリスクへの責任の低さ、自他を大切にする気持ちの低さを指摘している¹⁶⁾。また今野らは、避妊具がなくても一時の感情や雰囲気に流されて性交をしており知識があっても行動が伴っていない¹⁷⁾ことを報告している。さらに藤岡らは不確実な避妊行動による望まない妊娠は、男性より女性の方が受ける影響が大きく、若年妊娠、人工妊娠中絶の低下につながることを推測される¹⁸⁾と述べている。意図しない妊娠は、男女とも的人生や女性は健康にも影響し、ひいては子どもの虐待につながることも考えられる。避妊について互いに話し合い避妊行動をとることは、性行動をする上で必要不可欠である。

5) 避妊をしない理由と対人関係（青年期）下位尺度との相関

避妊をしない理由「対人関係（青年期）下位尺度と関連を見るために相関分析を行った。

「妊娠しない」では、「見捨てられ不安」との間で関連があった。見捨てられ不安の原因は親子関係による拒絶であり、井梅は、親しい人から拒絶され取り残されることに対する恐れ、相手の反応に過敏な傾向を表しており相手の反応に注意が向いているとし相手への依存性との関連を示唆している⁷⁾ 不安や見捨てられてしまうという強迫観念が、心理的に弱い立場となり、愛されたい、見捨てられないようにするために、自分は妊娠しないと思ってしまうことや避妊の意志表示ができないことが考えられる。小泉らは、愛着傾向が青年期の人間関係に及ぼす影響について安心傾向が高い人は、両親との関係も良好で、他者からも理解され自分の意思をもち、一方で低い人は両親との関係が良好でなく、自分の意思が弱く、孤独や寂しさを感じている¹⁹⁾と述べている。また、長谷川は、家族と臨機応変に物事を対処する関係をもつほど自己肯定意識が高く、性の責任性が高まることで間接的にコンドームの使用頻度影響を与えることを示唆している²⁰⁾。見捨てられ不安が強い学生には、教育の中でコミュニケーションをとれる環境と自己を尊重し自己肯定感があがるような関わりを持つことが必要であると考えられる。

「一体性の過剰希求」では、「自分の欲求を満たしたい」($p < .01$)、「一心同体になりたい」($p < .05$)との間で関連があった。井梅は、「一体性の過剰希求」は、過剰に他者との行動に反応を示す傾向がある。自分の要求や行動が100%共有され、常に自分と同じであると思いそのような相手を求める傾向があることを示している⁷⁾。このことは、感情や雰囲気流されても一心同体になり自分の欲求を満たしたい、他者との心理的距離が近く自身を中心に考え、対象をコントロールする傾向が優先していると考えられる。和田らは社会と他者との関係よりも自分のことを中心に考えているものほど、性的に寛容であり、性に伴う責任を意識していない¹⁵⁾と述べている。また、田名場らは、現代の青年の間には、対人場面での傷つきへの恐れから対人関係へのコミットを避け、その場の雰囲気がよければよいとする傾向がある²¹⁾と述べている。さらに堂上らは、避妊しない理由から知識不足や現実生活の対するリアリティのなさがあり、避妊行動をするためには自尊感情の向上や意思決定できる力を身に付けさせる必要性を示唆している²²⁾。

前述のように青年期は、大人から子どもへと移り変わっていく時期を指すが、この時期は多くの精神的な悩みを抱える時期でもある。吉田らは、青年期の友人関係が緊張や不安、孤独などの否定的感情を緩和・解消する、安定化の機能、対人関係場面での社会的スキルの学習機能が存在し青年期の友人との関わりは重要である²³⁾と指摘している。青年期の最も大きな発達課題は、アイデンティティの確立にあり、自我意識や社会意識も発達する非常に大切な時期である。また他者からの影響を受ける時期でもあり、この時期をどう過ごすのが非常に重要である。

以上のことから、大学教育の中でコミュニケーションをとれる環境と自己を尊重し自己肯定感が高められるような関わりを持つことで、自己を大切に避妊行動がとれると考える。また、大学生の不確実な避妊行動の認識と実施のずれをなくし健全な性行動を守るために入学当初など早い段階で正しい知識の習得および認識と実践の相違を回避する方策の必要性が示唆された。

V. 結論

1. 性交経験がある学生は、青年期の対象関係下位尺度の「一体性な過剰希求」が有意に高かった。
2. 青年期の対象関係下位尺度と若者の避妊行動との相関関係が明らかになった。「見捨てられ不安」と「妊娠しない」($p < .05$)との間に弱い正の相関が認められた。また、「一体性の過剰希求」と「自分の欲求を満たしたい」($p < .01$)、「一心同体になりたい」($p < .05$)との間に弱い正の相関が認められた。
3. 不安や見捨てられてしまうという強迫観念が、心理的に弱い立場となり、自分は妊娠しないと思うことや避妊の意志表示ができないことが考えられる。
4. 見捨てられ不安が強い学生には、大学教育の中で自己を尊重し自己肯定感が高められるような関わりをすることが避妊行動につながり、大学生の不確実な避妊行動の認識を早い段階で正しい知識の習得と認識と実践の相違を回避する方策の必要性が示唆された。

VI. 今後の課題

本研究は、回収率が 22.3%と低い。このことは性に対する回答のしづらさが考えられる。そのため、性を身近なものとしてとらえられるよう教育する側の意識やされる側の意識の変容を進めていくことが今後の課題である。

利益相反

開示すべき利益相反はない。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に心から感謝申し上げます。
尚、本研究は、所属大学イノベーション助成を受けたものである。

文献

- 1) 西平直喜. 大人になること 生育史心理学から. 東京大学出版会, 1995. P25～29頁
- 2) 西村・前掲書 p112～p136頁
- 3) Erikson, E.H. Identity and the Life cycle : Selected papers. International University Press, Inc. (エリクソン, E.H. 西平 直・中島 由恵 (訳) 2011. アイデンティティとライフサイクル 誠信書房) 1959.
- 4) Arnett, J. J. Emerging adulthood : A theory of development from the late teens through the twenties. American Psychologist, 55, 469 - 480. 2000.
- 5) 水本深喜, 山根律子. 青年期から成人期への移行期における母娘関係 ―「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の4類型モデル」の検討―. 教育心理学研究, 59, 462 - 473. 2011.
- 6) 井梅由美子. 青年期女子の母親と対象関係. 東京未来大学研究紀要. 4, 27 - 35. 2011.
- 7) 井梅由美子, 平井洋子, 青木紀久代, 他. 日本における青年期用対象関係尺度の開発. パーソナリティ研究. 14 (2), 181 - 193. 2006.
- 8) 一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会編. 「若者の性」白書 第6回青

- 少年の性行動全国調査報告．東京，小学館発行，2005.
- 9) 一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会編.「若者の性」白書 第8回青少年の性行動全国調査報告．東京，小学館発行，2019.
 - 10) 国立社会保障・人口問題研究所. 第15回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）. 2017.
 - 11) 溝口剛，相星有紀子，河野伸子. 大学生の「ふれあい合い恐怖的心性」に影響を与える要因についての研究親の養育態度と自己愛に注目して一. 大分大学教育福祉学部研究紀要. 2015.
 - 12) 高坂康雅，澤村いのり. 大学生が恋人とのセックス（性行為）をする理由とセックス（性行為）満足度・関係満足度との関連. 青年心理学研究. 29, 29 - 42. 2017.
 - 13) 厚生労働省 - 令和元年度の人工妊娠中絶件数. 2019.
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei_houkoku/19/>（アクセス：2021年12月6日）
 - 14) 高橋雪子，坂本保子，藤邊祐子. 大学生の性に関する調査（第一報）－青森県の3大学における大学生の性教育・性行動の実態－ 八戸学院大学紀要（62）173-184 2021.
 - 15) 和田実，西田智男. 性に対する態度及び性行動の規定因. 社会心理学研究. 7（1），54 - 58. 1992.
 - 16) 羽入雪子，佐藤怜. 大学生の避妊および低用量ピルに関する意識. 日本赤十字秋田短期大学紀要. 7, 53 - 59. 2002.
 - 17) 今野木綿子，西脇美春. 大学生における性知識・性モラルと性行動との関係. 山形県立保健医療大学. 9, 33 - 47. 2006.
 - 18) 藤岡奈美，村上彩乃，山科尚子. 男子学生の性行動・避妊行動の実態とそれに影響する性的態度. 母性衛生. 55（1），86 - 94. 2014.
 - 19) 小泉芽乃，齊藤 勇. 愛着傾向が青年期の人間関係に及ぼす影響について. 大正大学心理研究年報. 6, 75 - 88. 2013.
 - 20) 長谷川泰子. 若者のコンドーム使用を規定する要因. 思春期学. 2008, 26（3），343 - 349.
 - 21) 田名場美雪，佐々木大輔，佐藤清子. 青年期における基本的信頼感と対人関係. 弘前大学保健管理センター. 弘前大学保健管理概要. 21, 11 - 15. 2000.
 - 22) 堂上優美，泊祐子. 看護学生の避妊行動に関する意識. 小児保健研究. 65（3） 456 - 461. 2006.
 - 23) 吉田かける，谷口淳一，中地展生. 青年期における友人関係への動機づけが関係の希薄さに及ぼす影響. 帝塚山大学心理学部紀要. 5, 89 - 95. 2016.

筆者紹介

坂本保子 八戸学院大学健康医療学部 准教授
 藤邊祐子 八戸学院大学健康医療学部 講師
 高橋雪子 八戸学院大学健康医療学部 教授
 前森桃子 八戸が金大学健康医療学部 助手